

藤布とくらし

藤布といっても、どんな物かよく知らない世代の人が多くなっていると思われず。

藤布というのは、文字のとおり「藤」の繊維で織った布のことです。麻の繊維で織った布が「麻布」で、麻を畑で作り、その繊維を利用しました。

さて、藤は、畑に作るのではなく、山野に自生している藤のつる（藤づる）を切ってきて、その繊維を使って布にしました。生活の知恵でもあり、文化の一つでもあったといえます。

藤布は、ふとん皮や着物などに利用されたようですが、商人が持つてくる綿と交換して糸にし、布に織って木綿の着物などを作ったこともあったようです。

ここで、明治のころの藤布について記されたものを要約して紹介したいと思います。

これは、昭和十四年（一九三九）ごろ、旧津具村の村松幸衛門という人が、「聞き書き」をしたもので、天保年代から、明治期にわたって、山村のさまざまな様子が記録されています。

ちなみに幸衛門さんは、故村松信三郎さん（現村松登記測量

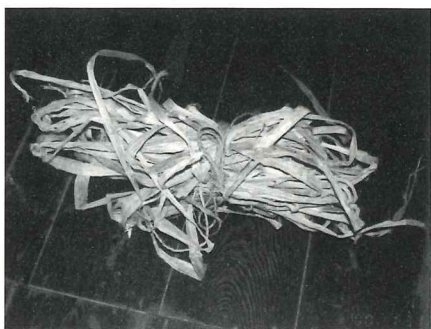
事務所）の兄で、昭和二十一年に病没しています。

「藤から藤布になるまで」

山の冬、雪がこない前に鎌を持つて行つて藤を切る。上等のものは「根ふじ」といつて、土をはつているもので、下等のものは、木などにまきついているものだ。これは、さくとき、さきにくい。

藤切りはだいたい男の仕事で一日切ると一駄（三六〇四〇貫、約一五〇キログラム）ほどあった。これを丸けて馬の背に着け家に帰つた。

藤の皮（表皮）を「つまきり」というものではぎ取り、白いねば皮を灰（灰）と一緒に、は



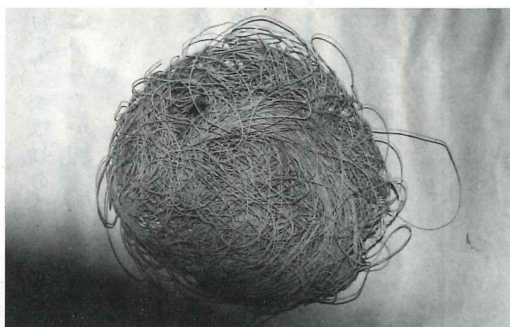
藤の皮

そり釜（馬に飲ませる湯をわかす大きな釜でつばがない）で長い時間かけて煮る。のち、川へ行つてさらす（洗水）。それから家へ持ち帰つて、軒下の干しざおに掛けて一日乾かして仕上げる。これが昼間の仕事になる。

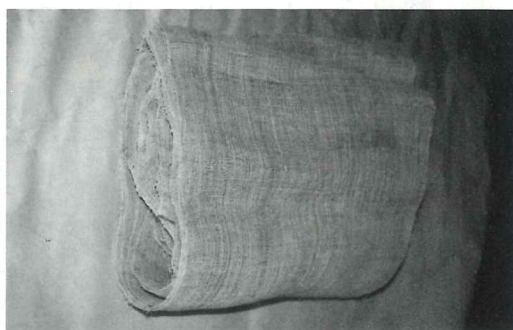
夜、いろいろばたで、たき火の

には、四晩か五晩はゆうに（たつぷり）かかった。おんけは、ふつう樺の皮を丸めて、底に板が入れている。おんけの高さは、一尺三寸（約四〇センチ）直径は八〜九寸（二寸は約三センチ）くらいだった。

布を織るのは女の仕事で、縁側や、上がりはななどへ「地はた」という織機を出して、両足を投げ出して座る。足の先で糸束をささえ、ひざの上で、「おさ」と「ひ」を動かして織る。一日に一反ないし、腕のいいものは二反くらいは織つた。（聞き書き）



藤の糸



藤布（写真はいずれも神田の金田●家所蔵のもの）

三反くらいだった」とも書かれています。なまくらというのには、一生懸命やらないという意味で、よく働くことが要求された山村の厳しさを表わしています。

また、藤や麻を「うむ」とき、小さい子供のある女性は、子供を胸にかかえて、その子供を腰にくくりつけては仕事をしたようです。今はこうしたくらしは無くなり、金さえあれば、なんでも手に入る時代です。だからこそ、今、先人たちの心と技を改めて考えてみるのがだいじな時かと思えます。

（設楽町文化財保護審議会委員）

金田喜兵衛

こうした事は、夜の十一時や十二時まで、なかには午前一時ごろまでした。藤や麻から糸を出し、おんけに入れるまでを「うむ」といつた。

おんけいっぱいに藤を「うむ」

一人の女性が、藤布や麻布など合わせて、一冬に十反くらい織つたとの記録もあります。子供のいる女やなまくら女は、